

## 《中国文学批評通史緒論訳注》 其五：顧易生・蔣凡 《兩漢文学批評史・緒論》（上）

甲斐，勝二  
福岡大学人文学部

東，英寿  
鹿児島大学教養部

<https://hdl.handle.net/2324/19705>

---

出版情報：福岡大学人文論叢．28（1），pp.233-254，1996-06．福岡大学研究所  
バージョン：  
権利関係：



《中国文学批評通史緒論訳注》其五

## 顧易生・蔣凡《両漢文学批評史・緒論》

(上)

甲 斐 勝 二  
東 英 寿\*

### 翻訳にあたって

先回に引き続き、《先秦両漢文学批評史》の両漢文学批評史の緒論部分を訳出する①。この部分は、蔣凡氏の担当になる。両漢とはもちろん前漢と後漢の事で、原書での表現に従えばそれぞれ西漢・東漢と呼ぶ事になる。顧易生・蔣凡の二人の方々は、共に上海復旦大学文学批評史研究室に所属の碩学である。先掲の《先秦文学批評史・緒論》翻訳に簡単ながらお二人の紹介をしているので、参照されたい。

この両漢文学批評史の編集方針については、《先秦両漢文学批評史・説明》の中で述べられている。以下に翻訳引用しておこう。

“両漢を論じるに当たっては、その時代が儒家経学の旺盛な時代であり、文学の発展が締め殺された時代だとこれまでしばしば大ざっぱに述べられてきた。もし本当にそうであれば、勢いよく発展した先秦の文論が、いきなり暗黒の谷間に転がり込み、長い四百年の

---

\*鹿児島大学助教授

時間を経た後、またもや突然魏晉南北朝の文学の自覚と発展の新しい夜明けを迎えるということになるが、この視点では物事の発展の法則に符合しない。本書の両漢編では特に思想文化運動の客観的史実から出発して、「断裂」という旧説を努めて矯正し、漢代の文論がその独特の形態で順次進展し、段階を分けて発展し、ついには歴史の使命に背かず、先秦から魏晉南北朝へと向かう過渡期の役割を果たした事を明らかにする。文学の自覚の種は既に両漢に胚胎されていたのであり、漢代の人びとはまことに文学批評の新たな高潮期を導く源流を開いたのである。我々は、先秦両漢の文学論の史料を考察するときに、その基本的な意味を理解することに努め、時代および論者の哲理などの思潮と有機的な関連付けを試み、彼らの歴史的地位とその深長さを示して、各々の段階の文学批評の特徴と精神的風貌を全面的に描き出そうと考えたのである。”

翻訳の文章が時には激しい調子になることがあるのは、もちろん蔣氏のスタイルでもあらうが、引用文に見えるように、両漢時代を文学論の歴史では空白期だと位置づけたかつての視点を矯正しようとする意気込みのためだと思われる。

この、両漢文学批評史の緒論部分は、原書で三十頁、翻訳すると相当な分量になるので、掲載の都合上半分に分け、《上》には、《一 資料範囲の拡大と文学観念の進歩・二 思想文化と社会の歴史的背景・三 初めての文学論の高まり》の三節を訳出し、参考資料として簡単な年表をつけた。但し個人の生卒年に関しては正確な年代という保証は小なく、大体の所と考えていただきたい。《下》には《四 第二回目の文学論の高まり・五 結末と反響》の二節と簡単な資料を付録につける予定である。また、些か書評めいたものがあれば、下篇でまとめてさせていただくことにする。

例によって、注釈は本論中の著者の視点に基づいてつけている。その中で訳者として気づいたところ、問題として指摘すべきと考えたところがあれば、「訳者」の名を付して区別する。翻訳の中に頻出する「文論」の語は、いわゆる「文学論」「文学批評」「文学批評理論」などを総括して呼ぶものだと理解されたい。翻訳ではなるべく簡明な日本語での翻訳に心がけられけれども、訳しすぎや翻訳者の理解不足による不明快な訳文など、読者ばかりでなく著者にも迷惑をおかけする箇所も多いかと恐れている。御指正をお待ちします。

末筆ながら、翻訳を快諾された蔣凡先生にお礼を申し上げます。

①《先秦文学批評史・緒論》の訳は福岡大学人文論叢第27巻第4号平成8年3月に掲載。

## 《兩漢文学批評・緒論》

### 一 資料範囲の拡大と文学観念の進歩

兩漢時代の文学観念は、先秦を継承し、しかも変化もしており、正しく混沌から明晰へと向かう過渡期にあった。經学による統治という雰囲気の中、漢の人々が文藝について議論する時には、そのおおむねが先秦の雑文学の観念を継承している。「文学」の語は、相変わらず文学をその内を含んだ文化學術のことを指していたのである。儒家の大家董仲舒(B.C.179-104?)がそうであるばかりでなく、生き生きとした思想を持ち正統から逸脱した桓譚(生卒年不詳)・王充(27-97?)もまた同様の痕跡を残している。しかし、その一方で文学の発展と時代の進歩により、詩歌・辞賦・散文を主とする文学的創作も日増しに栄えて、文学作品の地位も向上したのだった。そのために先秦時代にあった雑文学の観念は顕著な衝撃を受け始めた。人々の文学に対する認識も勢い変わらざるを得なかったのである。よって、兩漢時代では、文学と學術とがそれぞれに分かれて行くという新傾向が次第に生まれてきた。これによって、中国古代の文学理論批評の発展の為に新天地が開拓されたのだ。前漢の司馬遷(B.C.145/135-85?)の《史記》では重要な文学者の為に伝を立て、学者を集めた《儒林列伝》の中には彼らを書き入れていない。このことから、漢代の人々の文学観念にかなりの進歩が遂げられていたことがわかる。漢代の人々は、「文」と「学」、「文章」と「文学」の概念を分けて使い始めている。「文」あるいは「文章」をもって文学を呼び、「学」あるいは「文学」の語で學術を呼んだのである。これについては、《史記》や《漢書》の中に多くの例がみえる。この事は、彼らが文学には學術と違う所があるとはぼんやりと気づいていたことを物語る。この認識が萌芽であり出発に過ぎないとはいえ、それは後人の思索と研究を啓発したのだった。魏晉南北朝になると更に一歩進み、この「文」の中でも「文」と「筆」の分類に発展し、文学藝術の本質と特徴に広く深い研究が進められるのである①。

文学観念の変化は、兩漢の文学論における資料の範囲の拡大、および検討の深まりを促した。兩漢の文学理論批評に係る思想的資料は、諸子の著作(劉安(B.C.179-122)《淮南子》、王充《論衡》等)に含まれる詩文を論じた部分の他に、散文中の書信(司馬遷《報任安書》等の類)、序文(司馬遷《太史公自序》、班固(32-92)《離騷序》等の

類)、奏対(董仲舒《挙賢良对策》、劉向(B.C.77-6?)《條災異封事》等の類)のようなものがそうである。詩賦等の文学作品の中にも文論資料がある。例えば司馬相如(B.C.179-117)及び揚雄(B.C.53-A.D.18)の諸大賦序に論じられる「諷諫」の件が、その例証である。両漢は史書が非常に発達している。《史記》、《漢書》には更に豊富で非常に価値のある文論資料が含蔵されており、《漢書・藝文志》といった貴重なものばかりではなく、さらに文学者のために伝記を立て評論まで細かく加えているのである。例えば《史記・屈原賈生列伝》、《司馬相如列伝》、《漢書・司馬遷伝》、《揚雄伝》等は、共に漢代の人びとの文学に対する新たな認識を表すものであった。漢代の経学の著作の中にも文学を論じたものが多くある。経学古文学派がそうであるばかりでなく、今文学派もまたそうである②。つまり、後世の人々に非難される緯書の中にも、漢代儒学者の文学に対する注意すべき認識をかいま見ることができる③。例えば、《春秋緯説題辭》に言う:「詩は、天文の精であり、星辰の法則であり、人心の基準である。物事の次元では<詩>となり、まだ形となっていなければ「謀」であり、静寂であれば「心」となり、思いめぐらせば<志>となる。よって、詩は志を言うとなるのである」。これは先秦の「詩言志」説を継承して、神学的発展を加えたものである。しかし、「天人感応」の屈折を通して、我々はやはりその中に含まれるある種の合理的な要素を見出すことができる④。この説では「言志」説と「事物の次元では詩となる」という説を互いに結び付け、創作者の主観である「志」を強調するばかりではなく、さらに進んで社会の「事」と詩人の「志」との連携を明示したのであった。このことは、後世の人々が文学と現実の関係などの文学の本質に関わってくる重要問題を研究するときに、啓発を与えるものである。班固《漢書・芸文志》では、漢の楽府・詩歌が「悲喜に感じて、事象に導かれて発するもの」と論じている。緯書の「事物の次元では詩となる」説の影を微かながら見て取ることができよう。

《禮記・經解》の「溫柔敦厚」の説⑤、何休(129-182)《春秋公羊傳解詁》(宣公十五年)の「飢えるものはその食事を歌にし、労働に疲れたものはその仕事を歌にする」の論、鄭玄(127-200)《周禮・春官》注中の詩の「六義」に関する詳しい解説などには、統治思想となった儒家経学の文学及びその理論批評に対する影響の深さを更に強く示している⑥。事実が示すように、両漢文学論の資料は、経・史・子・集の中にあまねく広がっている。先秦と比べれば、それが自覚的な意識かどうかは問わず、漢代の人々は文学およびその理論批評に対して更に大きな関心と興味とを持っていたのである。当然ながら、興味と関心というものは、具体的な人物においては異なった内容を表していた。この事もまた

あらかじめ明らかにしておくべきであるし、その上これに対して様々なレベルや角度からの研究と認識が求められる。一つの単純な理論モデルを決めるべきではないのだ。これを要するに、《史記》・《漢書》中で文学家に傳が立てられ、詳しい評論が加えられたこと、及び文学理論批評の専論の相次ぐ出現、例えば《毛氏序》・王逸(生卒年不詳)《楚辭章句叙》及び鄭玄《詩譜序》などは、かなり深く、かなり系統的な理論探索を始めており、漢代の文学理論批評の新発展の指標となっている。兩漢の文学理論批評は、經学統治の囲いの下にあって屈折しつつも発展しえたのであるが、それはまたおのずと社会と歴史に基づくものであったのである。

## 二 思想文化と社会歴史的背景

あちらこちらで諸侯が戦っていた先秦時代と異なっており、漢朝は封建的大統一の時代である。しかし、秦漢の端境期では、やはり王朝交代の激動期を経るのである。秦二世元年(西暦前209年)、陳勝、呉廣が農民反乱を起こしてより、天下は共鳴して、中国封建社会における第一次農民一揆の序幕が切って落とされた。西暦前202年になると、楚漢戦争は決着し、漢の劉邦が大漢王朝を建てた。歴史に新しい一章が加えられたのである。

漢は秦の制度を引き継いだ。漢の統治者は、新王朝を強化するのに有利な前代の一切の制度をほとんどそのまま実行したのである。しかし、漢初の大混乱がようやく治まっても、人々は困苦にあえぎ、厳しく頻繁な搾取に耐えられなかった。加えて秦末の農民大一揆の教訓の記憶もまだ新しい。よって、漢代初期の統治者は、時勢に応じて対応を変え、「無為にして治める」という方法を実行して、人民に休息を与えようとする政策を決めたのであった。所謂「無為にして治める」とは、何にもしないというのではない。当時の特殊な社会状況に応じて、政府は基本的に「人民の希望に従い、混乱させない」(《漢書・刑法志》)ことによって、統治を強化させる目的の達成を計ったのである。歴史書の記事によれば、漢初には飢饉が発生して、「人は食らいあい、死者は半数以上」という悲惨な現象が起きている。このような状況の下、労役を軽くし賦税を少なくして、「十五に分けた内の一が税」という政策をとらざるを得なかったのである。このようにして、かなり長い休養期間を経て後、社会経済は迅速に蘇って発展し、漢の武帝の時代(B.C.141-87)になると、巨大な財産を蓄積するに至る。《漢書・食貨誌》ではこう言っている：

「武帝の初めに至る七十年間は、国家に事件は無く、水害干害にも遭わなかったので、

人々は自家用に足り、都も田舎も倉は皆一杯になり、政府の倉では財産が余った。首都に巨万の銭が積まれ、銭を束ねる縄が腐って数えられない程であり、穀物倉庫の穀物は一杯に積み重ねられたままに、あふれて露天に積まれ、腐って食べられない有様である。庶民の巷には多くの雄馬があり、田畑の道の間に群れをなしており、雌馬に乗るものは排除されてその集まりにいれてもらえなかった。」

経済の旺盛な発展は、社会に新しい活力を注入すると共に、同時に新らたな問題をももたらした。地主や富商の勝手な土地の占有が横行し、豪族や劣紳が地方では勝手に振舞い、王侯高級官僚になると、「奢侈を争い、邸宅室内や馬車、服装身分を越えて長上を犯すこと限り無し」（《漢書・食貨志》）とまでになった。このため、民情・風俗と思想の面貌も一変してしまったのである。

この社会の新しい変化は、非凡な才能と策略を持つ武帝に「無為にして治める」方針を捨てる決心をさせ、強力に文化教育事業と軍事的事業を興させたのである。ここにおいて、漢の武帝の時代は、中国の封建社会史上初めての光輝く時代となった。中華民族の誇りとして、当時の世界文化における頂点にそびえ立つものとなったのである⑦。漢の統治者は、思想の統一の強化に努めたばかりではなく、芸術文化にも注意を向け、文学表現に対してある種の新しい興味と熱情を示し、加えてこれを提唱したのだった。武帝は自分自身で詩文を書くことができたばかりではなく、さらに「楽府を立て、歌謡を採集する」（《漢書・藝文志・詩賦略序》）等、文藝の発展を促進するのに積極的な措置を採用した。武帝はかつて司馬相如の辞賦に対して、「朕はどうしてこの人と時を同じくすることができなかったのか」（《漢書・司馬相如列伝》）との賛嘆を発したことがある。その後、王侯貴族の中では、文藝を好み、文学を提唱した者も少なくない。漢の宣帝の時、多くの学者が辞賦を非難し、文学は「余計なもので切要なものではない」ものばかりだと見なした。宣帝は自ら弁解して「辞賦は大きな意義では伝統的《詩経》と価値を同じくし、小さな意義では美しくて喜ばしいものである」（《漢書・嚴朱吾丘主父徐嚴終王賈傳》）と言っている。真に当時の辞賦を代表とする純文学に地位を求めるものである。この気風は、後漢後期の靈帝（168-189）まで続き、長い間途絶えることがなかった。当時、皇帝は文学が好きで、「《皇義篇》五十章を自ら作った。そのために文賦を作り得る先生がたを招いて」（《後漢書卷六十下・蔡邕列傳》）、大いに支援したのである。諸侯貴族の中には、例えば《詩経》を好んだ高祖、同父の弟である楚元王交、其の後裔である劉向（B.C77-6）、劉歆（?-23）等の者は、皆「文章制作に長ず」と称せられたのである。また、梁の孝王劉武、河間

献王劉徳、淮南王劉安等は、更に広く賓客を集め、文人を招いて、芸術文化を切磋琢磨させたり、辞賦を作らせたりして、当時の文壇の屋台骨となったのである。中国古代においては、帝王貴族の文学に対する愛好と提唱は、巨大な政治的援助となった。桓譚は「淮南王が身分高く勢力を持ち豊かな財産を持っていなかったら、俊英を広く招聘して、書籍を著作することはできなかった」(《新論・求輔》,《全後漢文》巻十三に見える)と言っている。繁栄による豊かな経済的な物質が、政治と社会意識等の上層建築による仲介を通して、文学及び文論の発達を進めたのである。

しかしながら、政治経済などの外部の歴史的条件の他に、両漢文学の発展には更に直接的な思想論争と文化(主に文学を指す)の繁栄という背景があったのである。漢初の大乱が治まるや、経済は凋落し、人々は衣食住の問題解決ばかりを考えて、他に振り向く余裕はなかった。よって《漢書・儒林傳》には「学校の事業に手が及ばない」と言うわけだ。文化事業はしばらく顧みられなかったのである。しかも、思想文化事業を発展させるには、相当の長い準備と蓄積が必要である。実際、漢初<sup>1</sup>の政治では黄老思想を尊んだので、「無為」によって治め、人々に休息を与えて、あまり干渉しなかった。秦王朝の焚書坑儒という過酷な思想統制と比べて、それこそかなり緩やかで開放的なものであった。後世の思想と文化の回復と発展の為に条件を準備したのである。当時の諸子百家の学及び自由な論争の雰囲気は、漢初<sup>2</sup>の統治者の黄老崇拜によって止みはしなかった。諸子百家の学<sup>3</sup>の思想交流は、両漢幾百年の歴史の中で、様々な特殊な方法で生き続けていたのである。武帝の統治の全盛期には、黄老の「無為」の思想は、社会の政治経済の巨大な変化からの要求に既に適応できなかった。このために、統治者は思想上の方向を改め、より適切な方策を別に探さざるを得なかった。よって、黄老の「無為」から儒家の「有為」の思想に移行するのは当然となる。天下を統一すれば、思想の統一を要求するのは必然である。主観的に言って、「異端」思想の存在は許されない。と言うわけで、建元六年(紀元前135)黄老の言を好んだ竇太后が世を去ると、壮大な志を抱いた意気盛んな青年武帝が政権を握ったのをきっかけに、儒家思想の地位が迅速に向上し、ついには黄老の学及び諸子百家を超えて首位に立ち、輝かしき統治思想となったのである。ここに於て、武帝は董仲舒の建議を受け入れて、「諸子百家を排斥し」、儒術のみを尊ぶという状況をもたらして、この後二千年余りにわたる封建社会が儒家思想を正統とする先駆けとなる。しかし、主観的な願望と実際の状況には距離があった事は明らかにしておかねばならない。漢初以来、思想文化方面の自由な気風は歴史の慣性作用によって、依然として先へと進む運動を続けており、急に止



めることは難しいものである。つまり、武帝の時期を例に取れば、儒学は「独尊」の名を得たが、もし統治者の実用に不適であれば、やはり他と同様に「排斥」される可能性がある。例えば泰山封禪の行事では、武帝は諸儒が「《詩經》《書經》の昔の文章に拘泥して、行う度胸がない」と見なし、「諸儒をことごとく罷免して用いなかった」（《史記・武帝紀》及び《封禪書》参考）。また黄老及び百家の言になると、一概に「排斥」されたとは更に言い難い。《史記・太史公自序》に載せる司馬談《論六家要指》では：「天下のおもむくところは一つであっても、考え方は何百もあり、同じ所に帰すとしても、その道には違いがあるものだ。彼の陰陽・儒・墨・名・法・道徳家等は国を統治を務めとする。ただどこから出発するかの道を異にし、何を重んじ何を軽ろんじるかのちがいがただけなのだ」と言っている。司馬談は元封元年（西暦前110年）に死んでいる。正しく武帝が董仲舒の建議を受け入れて二〇余年後の全盛期であったけれども、司馬氏の親子は依然として漢初の影響を承けている。彼ら親子は儒家・道家及び百家の学をもまぜあわせており、それらは様々な思想の一致するものであり、道は違っても同じ所に至るもので、同じように封建統治の利益に沿うものだと思っていた。また、二人には明らかに道家を崇拝する傾向もあるのだ。この他に、昭帝六年（西暦前81年）の塩・鉄・酒の専売をめぐる議論での大弁論は、儒・法諸家の関係する基本的な国策の論争で、主役の一人御史大夫の桑弘羊（B.C.152-80）は、当時の法家思想の代表であった⑧。彼は武帝の賞賛によって一気に地位が向上した人物である。法家思想は排斥され尽くしてはいなかったのである。また、主父偃（?-B.C.127）は「長短縦横の諸子の学を学び、年を取ってから《易》・《春秋》・百家の言を学んだ」（《漢書・主父偃傳》）が、彼は臣下として武帝に寵愛されたこともあったのだ。また、東方朔は「《詩》《書》百家の言を暗唱した」（《漢書・東方朔》）が、彼は武帝身邊の文学侍従の臣下である。これらより、諸子百家の言は決して跡形もなく滅びてしまっていない事は明かだ。武帝の時期、封建社会として「儒学独尊」、思想の専制は始まっていたけれども、同時に、相対的に言って、思想文化領域には依然としてある種の自由な空気が漂っていたことを、実際の状況が物語る。このような矛盾する現象は、社会思想の発展の歴史的産物である。思想運動の歴史的な慣性作用がその一つの原因であり、別の原因としては、当時の封建統治階級がちょうど上昇時期にあり、自己の事業と前途に自信に満ちていたがため、その胸襟はかなり広げられ、諸子百家の言を受け入れる度量もあったことである。司馬相如は《難蜀父老》の文の中で、その秘密を語っている：「賢明な方が君位に就かれるや、どうして些細な事にこだわり、文章のはし

ばしや世の習わしにとらわれたり、何事も訓戒や言伝えに通りにして、その時代に迎合するような事ばかりに意を払われることがあるだろうか。賢明な人物であれば、必ずや卓抜せる議論により新しい事業の基礎を築き、その事業を子孫に伝え、万世の後まで世の規範となろうとするであろう。故に賢君はあらゆる物事を一つに包まんと駆け回り、天地に並び参ぜようと肝胆を砕かれるのである」。これは、当時の統治者の思想文化の宣言と言うばかりではない。「すべての物事を一つに包む」という振舞い、「天地に並び参じる」という思想、これらは何という心意気と気迫であろう。よって、漢代四百余年の歴史発展は、たとえ經学による統治の存在があったとしても、決してそれは只一つ思想モデルだけが存在を許されたのではなかった。諸子百家の言を受け入れて、思想理論が相対的に自由だった雰囲気こそが、文化（文学及び文論を含む）発展を促進する重要な要素なのである。

従って、古典文論と密接に関係する文学の角度から言うならば、漢代文学の発展は、おもに辞賦・散文詩歌（楽府詩を含む）等の創作の高度の繁栄に現れている。先秦時代の屈原の騷体文学を主に継承した漢賦は、司馬相如、揚雄などの人物に至ると、極めて盛んとなり、漢代文学の代表となった。一方、漢代の偉大な帝国の創設に伴って、歴史文化を努めてまとめ上げ、かつ漢代の大統一に新しい解釈を与える散文創作もまた勢い良く発展した。議論文では、賈誼の《過秦論》、史傳文では司馬遷の《史記》・班固《漢書》等の名作は、さらに「天と人との際を究め、古今の変化に通じ」、文壇に不朽の「一家の言」となって、万代を潤したのである。詩歌の面では、文章家の四言詩には、大した成果はなかったが、楽府民歌の発展はみなぎる活力を示し、かつ後漢に発展し始めた五言詩を直接啓発した。文学の発展は、当時の人物の注意と重視を招き、同時に文学の本質・社会効能及び芸術創作の諸問題に対して、人々の深い探索と検討を促進させたのであった。その他に、屈原及びその文学への評価、司馬遷と《史記》に関する評価、及び例えば漢賦への審美評価などの当時の現代文学に対する評価等、これら文学に関わる問題を巡る三大論争は、ほとんど漢代全体を貫いて行われ、文学理論批評の発展を直接促進したのである⑨。

### 三 第一次文論の高潮

論者の中には、兩漢は經学統治の時代であり、經学家は教化を非常に重んじて、文藝の特徴をないがしろにしたので、文学及びその理論批評の発展を窒息させてしまったのだと言う者もいる。この見方にはその根拠はあるのだけれども一面的すぎる。なぜなら、事

実が語るところでは、先秦の文論と比較して、両漢の文論には発展と深化があるからだ。もし、両漢の文学が文論の歴史の中で断絶された空白の状態に過ぎないものであったとしたら、先秦の文論という混沌として始まったばかりの初級段階からどうして「文学の自覚」という魏晋南北朝のかなり高度の段階に発展することができようか<sup>⑩</sup>。実際には、両漢文論は正しく前後の発展段階とは異なる特殊な彩りをもって、上は先秦の文論と接し、下は魏晋南北朝文論を導くという過渡的な段階を形成して、独自の歴史的な貢献を果たしたのであった。

両漢文論は、発展して概ね二つの高潮期を形成し、かつ高らかに響きわたる終章を導きだしている。第一次の文論の高潮期は前漢前期の武帝時代の前後である。第二次の文論の高潮期は、両漢の際（即ち前漢の末と後漢の初め）に生まれた。そして終章と反響は後漢後期に出現したのである。前漢の初めは、人々は衣食の問題の解決に忙しく、文論は鳴りをひそめていた。しかし、これはひそかに思想資料を蓄積していた醸しの段階である。文論が発展して武帝の時代になると、情勢は大いに改まり、条件は既につぶさに整った。よって、封建的英雄時代に、文化の普遍の高揚に従って、時期が熟すれば事は自然に成就するように、まことに順調に両漢第一次の文論の高潮期の幕が開かれたのである。文壇の英雄達は皆この広々とした歴史舞台の上で、歌い、泣き、悲しみ、賞賛すべき一幕を演出したのである。たとえ淮南王劉安と司馬遷が、一人は悲惨にも残酷な仕打ちに出会い、一人は宮刑に辱められたとしても、彼らは共に社会と歴史のために大きな貢献をしたし、心を揺り動かす英雄悲劇をそれぞれ自ら演じたのであった。彼らの文論もまた伝統に立ち向かう英雄悲劇の色彩に当然ながら染まっていた。

さて、当時の文論の第一の特色としては、文論の高潮期の到来をもたらしたその功績の一部が帝王貴族の提唱にあるのは当然だけれども、より重要なのは、その時代がとりわけ滋養豊かな栄養を与えて養育したという事である。漢の初めから武帝の即位のころまで、儒家思想は統治的地位には就いておらず、經学による統治はこの後の事であった。この時期の儒家の文論は、漢初以来の準備と蓄積をへて、正統地位を争う學術論争の中で影響力を拡大し、かつ次第に優勢な地位を占めて行き、ついには統治階級によって古代文論の正統なるものと認められたのである。たとえば《禮記・楽記》と《毛詩序》（含む大序・小序）は、後代の文論に対する影響はとりわけ大きい<sup>⑪</sup>。そのほかに董仲舒の文藝思想は、後世それを総括し研究したものは少ないけれども、漢代にあっては高い地位を持っていた<sup>⑫</sup>。この時期の儒家の文論の特色としては、先秦の「詩言志」説を基礎として継承した上

に、さらに一步進んで心・物の感応及び文藝と現実の関係等の問題を提出した所にある。《楽記・楽本》篇では、「音の発生は、人の心より生まれるものだ。人の心が動くのは、物がそうさせるのである。物に感銘してのち搖れ動く、だからこそ声にそれが現れる。声は反応しあって、変化がそこに起こる、変化してちゃんとした形をとる、これを音という。音を排列して楽しむ、文武の舞踏になると、それを楽と謂うのだ」と言っている。ここで論じられているのは、文藝が生まれる問題である。いわゆる「物」とは自然の景観、例えば春の花、春の鳥、秋の月、秋の蟬などばかりを指すのではない。社会事物例えば国家の盛衰や社会の治乱等をも指していることがより重要なのである。つまり、客観的外物が作家芸術家の心の琴線を刺激し、推し動かし、弾けば、それによって創作の衝動が引き起こされるのである。心物感応理論(後人は概括して「物感説」という)のもとでは、創作主体の仲介作用を経て、文藝はだんだんと現実と人生に顔を向け始める事になるだろう。よって、《毛詩序》では「治まった世の中の音色は、安らいでいて楽しい、その政治はおだやかだからだ。乱世の音色は、怨み怒っている、その政治が道理に背いているからだ。亡国の音は哀しく悲しい、その民が苦しんでいるからだ」と言う。詩歌における芸術的風格の違いは、まさに現実生活の反映だと言うのである。この見方は先秦の文論に比べて一步前進したものだ。しかし、残念なのは、漢儒のいわゆる「物」は、封建統治者の視野の限界により、現実生活の片隅を指すばかりであったことである。下層人民の広範な生活世界に対しては、眼に入らないか、あるいは色眼鏡をつけて眺めるのが常であった。よって、そのいわゆる「反映」には、常に歪められたものや変形された生活が表現されたのである⑬。

第二の特色として、「情」を以て「志」を補う理論を提出し、文藝の情感的特徴を一層深めて示したことである。《毛詩・序》では、「詩は志の至るものである。……情が心の中で動いて言葉に形となって現れたものである」と言って、「情と志が一つである」という認識を示した。「言志」説にとって理論的補充として抒情が必要だと考えたのである。この考え方は《荀子・楽論》に「音楽の楽は<楽しみ>の<楽>のことである。人の情として必ずや免れるものではない」と言うところに来源をもつ。しかし比較してみると、《毛詩序》の方が更に全面的で、体系立っており、理論化も進んでいる。漢儒の所謂「志」は、理性道德規範的な思想の志向を指すことが多く、「情」となると個人の喜怒哀楽及びその「血気心知の性」(《禮記・楽記》に見える)に起こることは免れず、これは多くが潜在意識の範囲に属し、個性を表出する理論的要求を示すものだった⑭。しかしながら、

当時の漢儒は、儒道の権威と統一を守るために、また荀子の「道を以て欲を制する」(《楽論》)の主張に基づいて、それを繕う理論を出してきた。つまりは詩歌創作では「情に発しても、礼儀の範囲にとどまる」(《毛詩序》)ことを求めたのであった。その所謂「情」は必ず「溫柔敦厚」(《禮記・経解》)という詩の教えの原則に従わねばならなかった。つまるところ、お上の政治を怨んで風刺することは許されるのだが、怨んでもその「正」しさを失ってはならなかったのだ。これは感情を吐露して怒り闘う文学を排斥するものに他ならない。

第三の特色としては、文藝の社会効用の面で、教化中心説を深めたことである。例えば《毛氏序》は直接《荀子》及び《楽記》の影響を受けて、詩歌が「美(賞賛)」と「刺(批判)」を通過することによって、「上はそれによって下を間接的に教化し、下はそれによって間接的に上を批判する」という巨大な社会作用の実現を強調したのである。儒家の経学者は、「よって、得失を正し、天地を動かし、鬼神を感動させるのは、詩より近いものはない」と断言したのである。文学の賞賛批判風論作用を通して、「風俗を移し変える」(《禮記・楽記》)という社会目的を到達するというわけだ。董仲舒は更に「堤防」を以て文学を例えた。彼が言うには、「万民の利に従うのは、水が下に向かって流れるのと同じである。教化によってこれに堤防を築かねば、止めることはできないのだ。それ故に、教化が立てられて、邪惡なものが皆阻止されるならば、その堤防は完全なのである。教化が廃れて邪惡なものが並び生じて、刑罰では間に合わないようであれば、その堤防は壊れているのである」(《漢書・董仲舒傳》)。ここで言う「教化」は主に礼楽活動を指す。これにより教化の「堤防」となる文藝の、その大きな社会作用が知れるだろう。ここで論じられる文藝の政治価値と倫理意義が、武帝の儒術独尊によって思想を統一しようとした要求と合致するのは、暗黙の約束である。封建社会の上昇気流にあって、文藝の教化中心説を提唱して、文藝に封建政治及びその倫理道德へのサービスを求めること、これにはやはり相当の歴史的作用がある。しかし、文藝を封建政治とその倫理道德の範囲の中に押し込めてしまうことは、視野が狭すぎると言わねばならない。なぜならば、生活における人と人との関係は、政治と道德のほか、多くの広範な領域が存在するからである。とりわけ創作主体となる人そのものに対する研究、例えば心理意識の流れとか、情感の要求の変化などの審美的関係には、科学と論理の諸学と比較するとき、文藝には特殊な機能があるというべきである。しかし、前漢の儒者にはほとんどこれらを取り上げたものはいなかった。よって、後世の道学者が一面的に文藝の教化機能を強調し、封建統治者の文藝に対して簡

略化、教条化の方法を作り上げたのは、その源をたどれば、漢代の儒学者に相当の責任があるのだ。

第四の特色としては創作論の面で、《毛氏序》が「六義」の説を提出したことがあげられる。「詩には六義がある。一に風、二に賦、三に比、四に興、五に雅、六に頌という」。この理論は、後二千年近い封建的文論の発展に影響を与え、儒家の伝統的創作論の核心部分を形成した。宋代朱熹の三經三緯の解釈によると、風・雅・頌とは、詩歌の分類とその風格特徴に対する認識で、賦・比・興は、古代詩歌の表現方法に対する総括である。賦・比・興という挙げ方は、実質的に古代の文学形象思维理論の萌芽であって、その影響はきわめて深く大きなものがある。批評と鑑賞の面に至ると、《楽記》は「音に詳しくなって音楽を理解する」と「音楽に詳しくなって政治を理解する」(《楽本》篇に見える)という二つの批評原則を示した。作品を具体的に批評しながら理論を検証し、同時にこれによって現実に対する審美的認識を獲得したのであった。董仲舒は更に拡大して、「詩の解釈においては文字の訓詁にこだわらない」という批評と鑑賞の方法を提出した。人々が作品を批評あるいは鑑賞するときに、文藝を理解して、想像を馳せ、単純な文字の意味の範囲を越えて、豊かな連想と審美的再想像を行うように求めたのであった。この理論は、後人による更なる発展を経て、中国の古典文学創作と批評の優れた伝統となっている。

以上述べたいくつかの面から見ると、この時期の儒家文論には、先秦文論に比べて確かに一步発展しており、理論的な貢献も果している。しかし、視点を変えると、先秦の儒家に比べれば、漢儒の文論家の保守的傾向も日増しに強められて行ったのだった。董仲舒の所謂「天下に二道なし」、「聖者は天を法として、賢者は聖者を法とする」、並びに「六芸をもって万民の生活を養い豊かにする」という理論(《春秋繁露・楚莊王》を参照)は、歴史的には荀子を受け、将来的には揚雄を導くもので、後世の明道、微聖、宗經という伝統的な文学理論モデルのひな型であった<sup>⑮</sup>。

正しく、「一つの音だけでは曲にはならない」とよく言われるように、当時の文論は、もし儒家の学生ばかりが唯一声を挙げていたのであれば、理論の高潮はまったく生まれなかったであろう。この時期の文論の高潮は思想闘争と学術論争の中から自然に現れて来たものなのである。淮南王劉安が主篇した《淮南子》及び司馬遷の《史記》は、それぞれ思想や歴史的著作であるが、文学作品としても読むことができる。その中には豊富で生き生きとした文学思想を埋蔵しているのだ。それらは儒家の伝統的文学観に雷同するものではなく、不思議な光・独特の彩りを放ち、自ずから一家の言をなしている。《淮南子》は道

をもって主とし、百家の思想を総合して、儒家の禮学を猛烈に批判し、思想の正当性を力づくで奪い取ろうとする闘争にあって、外部から儒家の文学論に攻撃を仕掛けたのであった⑩。《史記》の場合は儒家の内部から懷疑、修正、発展を加えるのが常であった⑪。二者は内外から結び付いて、儒家の伝統的文論に対して厳しく重い挑戦を仕掛けたのである。しかし、挑戦と応戦の文学論争にあっては、互いに排斥と闘争をしつつ、また互いの浸透と吸収もあり、闘争する双方は、正しく＜同＞中に＜異＞あり、＜異＞中に＜同＞あり、というべきであった。学術闘争もこのために複雑で微妙な局面を迎え、ますます盛んになるという高潮期を作り上げたのである。

＜同＞の点から見てみよう。同一の時代精神の薫陶の下、同時代の儒家の伝統的文論と同じように、《淮南子》と《史記》の文学論は、共に体系性を持ち、規模も大きく、英雄時代の非凡な理論的気迫が示されている。司馬遷の基本的思想傾向は儒家に属し、《史記》の文論中の儒家の影響はこの点に見受けられる。その中の「《春秋》の義法」の理論は、中国の伝記文学の理論的基礎を築くだけでなく、後代の詩文とりわけ小説・演劇などの文学創作に影響を与えたのだった⑫。この理論においては当時の経学者たちが唱えた詩歌は「美刺（賞賛と批判）」をもつべしという理論の精神と通じる。司馬遷が当時の辞賦を評論する時も、「美刺」の精神をもって文学の「風論」作用を談じるのである。《淮南子》の文論となると、道家思想を主導とするけれども、儒学が次第に隆盛する転換点にあって、やはりある種の儒家理論を溶かしこみ、時代の要求に適應して、道家の文論の体系を改め発展させようとしたのだ。例えば、文藝が生み出されるという問題に関して、「人は生まれたときは静寂な状態であり、……感覚がはたらいて後に動作が生まれるのだ」（《原道訓》）と考えている。文藝の始まりは「物事が近づき、それに反応した」（《詮言訓》）結果なのだという。これは《楽記》の中の心物感應の理論と近いものである。文藝の社会的効用に関しては、「お上が提唱して、人々が唱和する」（《秦族訓》）もので、文藝作品によって「民を教化し」、「世間を教化し」て、それによって「風俗を移し変える」という社会目的を果たすと考えている（《主術訓》）。これは、儒家の論調と全く同じである。創作と批評に関しては、「先王の考えに合わない言葉は道とは言えず、雅頌に調和しない音は楽とは言えない」（《秦族訓》）と主張する。これは儒者の論と軌を一にする。「同声相に応ず」、共鳴して調和に至るという理論に関しても、董仲舒と似ている。共に時代の思想の産物なのだ。武帝の初年になると、儒・道二家の文論は互いに浸透しあい、相互に吸収しあった。この趨勢は、魏晉南北朝の文論に影響を与えるほどになった。例えば魏の

曹丕の《典論・論文》、西晋の陸機の《文賦》などは、共に儒家道家の二種の思想を融合して自ら新しい論を打ち立てたものである。

別の視点から見てみよう。まず、《淮南子》の文論は道家思想を主において、百家を総合したもので、《史記》の文論は儒家思想を主として百家を総合したものである。これは、師匠の視点を忠実に極め、家学を伝えるという儒家の学者からすると、「百家」の学を学ぶ点で、思想的には常軌を逸脱する。よって、揚雄は《淮南子》と《史記》を、「雑」の病を犯したもの（《法言・問神》）とそしったことがあるし、班固は更に司馬遷の「是非が聖人の判断基準と大いに繆う」（《漢書・司馬遷傳贊》）所を批判したのである。所謂「雑」・「繆」とはつまりは儒家観念に対する離脱と挑戦なのであって、「聖人」の是非をその是非としたのではないという事である。その理論は開放的で、各家各流派の思想資料を吸収して自己の理論体系を充実させ、並びに文学思想の解放を促進したのだった。当時の儒家文論の保守性、封鎖性はそれほど強烈ではなく、その理論的貢献も比較的大きかった。これはまさに対立する文論の挑戦及び応戦が力強く行われた事と関係するものである。

その次に、「文」と「道」の関係から見ると、《淮南子》と儒者は同様に「道」が根本であると強調している。しかし、儒家の仁義道德という孔孟の道とは異なる。《淮南子》が論じるのは主に老荘の「自然」無為の道を継承し発展させたものだ。道は「一が立ちて万物がここに生まれる」もので、文藝も「道」から派生してできたものと認める。けれども、「道」は「天地を包み、無形をさすかった」ものである。よって、「有は無に生まれ、実は虚に出る」（《原道訓》）ものとなる。この具体的な形態のない「道」は、主に包まざる所のない、存在しないところのない最高の宇宙法則である。作者は文藝を宇宙の運動変化の体系の中に置いて、思索と考察を試み、人々が儒家の「詩言志」の主体論的研究から更に一步を進めて視野を広げ、文藝の本体論の探求へと昇華させるのを意図したのである。このような開拓精神は、まことに貴重なものだった。しかし、残念なのは、そこで論じられることが指摘だけにとどまり、確実な展開をしなかった事である。

第三に、情を表出し志を述べるという角度から見てみよう。《淮南子》と《史記》は、楚文化の熏陶と影響をうけて、屈原の「発憤して情を表出する」（《惜誦》）という精神を発揚した。その精神を文論に導入して、それにしたがって理論的核心を構成したのである。《淮南子》では文藝が「憤りが心の中に発して外界に形を取る」ものだと考える。「憤」とは、発することで、本来は「内面に充実した」情感の表現なのである（高誘注に見える）。彼が更に歩を進めて強調するのは、「正直者は正しきが故に困窮し、賢者は朝廷



からはじき出される」,「慈母は巷に詠い, 嫡子は遠き楚国に思いをはせる」(《淮南子・修務訓》) 事で, ここでは抑圧された感情を表出する理論的要求が表現されている。司馬遷の場合は, 自分の人生経験と創作体験を結び合わせて, はっきりと「発憤して書を著す」の説を提起した。「《詩経》三百篇は, 概ね聖人賢者が発憤して作ったものである。これらの人は皆気持ちに鬱屈があり, その道を貫き通すことができなかったのである。よって昔の事を述べて, これからの事に思いをはせたのだ」(《史記・太史公自序》) と考えたのである。社会の圧迫が大きくなれば大きくなるほど, 作家の理想は圧迫を受けて義憤はいよいよ深くなる。暗黒の現実に対抗する闘争精神はいよいよ強烈になり, 作品の社会的意義もいよいよ深くなる。司馬遷はただに「発憤」の情が社会の現実から来ることを指摘するばかりではなく, 更に歩を進めて「公正な人間でなければ発憤はしない」(《史記・伯夷列伝》) と指摘した。個性の自由な発揮と現実を積極的に反映することの統一を強調したのである。もし, 当時の儒者の「温厚敦柔」, 「主文諷諫」といった主張に<sup>⑩</sup>, 強烈な矛盾と闘争を回避するある種の傾向があるのだとすれば, それに比べて「発憤して書を著す」の主張は理論的に大きく進歩したものではあるまいか。

第四に, 創作と批評の理論の点から見てみよう。もし, 儒者が強調するのが《詩》《書》《春秋》の「正」で, 雅頌の典雅な音調をモデルにすることを求めるのであれば, 劉安と司馬遷は, 楚文化の影響をうけたが故に, 更に芸術の「奇」を強調して, 屈原の作品に非常に高い芸術評価を与えたのである<sup>⑪</sup>。当時の儒家の伝統的な文論は《詩経》の古典現実精神を発揚することに重点があった。劉安と司馬遷の場合は, 《詩経》を肯定すると同時に, 更に《楚辞》の理想主義とロマン精神を発揚したのである。このような「奇」と「正」の相互の影響による誕生は, 付きつ離れつ, 互いに闘争しながら共に前漢中期の文論の発展を促進したのである。そのほかに, 劉安の《離騷傳叙》(考えるに, 既に散逸し, その主要な精神は班固《離騷序》に引く所に見える), 司馬遷《史記・屈原列伝》と, 次々に受け継がれて, 屈原及びその作品に対する具体的な評論は, 非常に大きな反響を呼んで, 後世の激烈な論争を引き起こしたのである。論争の結果がどうであれ, 劉安と司馬遷は屈原及び楚辞に見える《詩経》の伝統とは異なった文化源流の水門を開き, 古典文学論の内容を大いに豊富にしたのである。その貢献には無視し得ないものがある。更に, 復古に反対し, 新しさを創り出すこと, 及び芸術弁証法の面でも, 《淮南子》と《史記》の文論は, 共に儒家の伝統的文論に勝るのだ。

これを要するに, 前漢中期に流派に分かれて対立した文論は, 異なる中でも同じものが

あり、同じものの中にも異なるものがあった。各々が各々の理論的特色を持って貢献をすると共に、學術論争の対立する中でお互いに文論の高潮期の出現を促したのである。古代ギリシャのヘラクレイトス(約B.C.540-480)は、こう言ったことがある:「互いに排斥するものが結合して一つになり、異なる音調が最も美しいハーモニーを作り上げる」(北京大学美学研究室編《西方美学家の美と美感を論じる》に見える)。もし、この時期の文論の高潮期を、氣勢壮大、規模盛大な交響曲に例えるならば、当時の儒学生及び劉安・司馬遷等の人物は、それぞれ鳴り響く「異なる音調」を奏でて、その時代の主題を競う中で次々に現れ、互いに補充し、そしてその時代の文論の輝ける楽章をともに豊かにし、また完成もさせたのである。

(’96 3/21 以下続稿)

## 兩漢文学批評史・緒論(上) 注

- ①「文」「筆」:文学作品の増加にともない、その分類のために文体区分の問題が起こって来る。そこに「文」「筆」の区別が起こって来た。「文筆」とくれば、文章一般をさし、「筆」となると章奏などの実用の文章を指し概ね無韻であることから、「文」が有韻の文章を指すことになる。ただし、実際の用例では厳密に区別を付けて使用されたわけではない。《魏晉南北朝文学批評史》第二編南北朝文学批評第二章第一節文筆説参照。
- ②「古文学派」・「今文学派」:秦の焚書の後再構築された経書は、漢代通用の隸書(今文)で書かれていたが、焚書以前の「古文」で書かれた経書が発見されるにおよび、字体の違いによる意味解釈の違いや、篇章の異同、内容の相違などが起こり、学派が分かれることになる。緯書は今文派と関係があった。
- ③「緯書」:緯とは横糸の事、經典の経が縦糸の意味であるところから、經典を助けて共に織物をおこなすものとされる。当時はかなり行われ、議論の根拠となったが、予言や神秘的な内容が多く南朝宋代に取締りに会い、隋代には焚書にあった。
- ④「天人感応」:天を意思と目的を持つ不変のものとして、天に代わって政治を行うのが、天の子である皇帝の仕事となる。天は慶兆や、災害異事をもって、天子誉めたり叱責したりすると言うもの。この思想は、漢代儒学者が文学の教化作用を強調する傾向及び詩論において美刺風諭説の形成と発展に密接な関係があると、筆者は述べる。第二章第四節董仲舒参照
- ⑤溫柔敦厚:孔子の語として伝えられるもので、温とは顔色の温潤なこと、柔とは性情が

柔和なこと。その国の民の様子がそうであれば、《詩經》の政治倫理的調和をもって諷諫し、直接には指摘しないという教育に沿うと言うもの。《詩經》の性格に対する儒教の理解を示すものでもある。第二章第二節《毛詩序》及三家詩論。

- ⑥「六義」：風・賦・比・興・雅・頌の事を指す。この解釈にはしばしば違いが見られ、《毛詩正義》の説が一番影響が大きいものではあるが、《周禮・春官・大師》鄭玄注には「風とは聖賢の治道による教化のなごりを言う。賦とは鋪（しく）である。今の政治の善悪を鋪陳する。比とは今の政治の失敗を示すもの。直接非難はできかねるので、類似のもので例えて言うのである。興とは今の政治の好い所を示す。へつらうわけにはいかなないので善事で例えて勧めるのである。雅とは正である。現今の正しいものは後世の規範となることを言うのだ。頌とは誦のことである。現在の徳を誦して広め誉めるのである」と述べられており、その政治的な強い意識が見て取れる。第二章第二節《毛詩序》及三家詩論。
- ⑦「中華民族」：中華民族の語は、最近様々な場面でしばしば用いられるが、訳者の立場から見ればここで言う「中華民族」とは、同一文化・言語をもつ集団の一般的な「民族」を言うのではなく、多言語多民族国家である中国に暮らしながら、中国としての伝統文化を継承しようとする人々を指すようである。
- ⑧「塩・鉄・酒の専売をめぐる議論」：当時行われていた専売にたいして、廃止論がおこり、これに関して朝廷で討論が行われた。法家思想に立つものは財政上の必要から廃止に反対し、儒家思想に立つものは人々の利益を損なうものとして廃止を訴えた。《塩鉄論》にその議論を載せる。
- ⑨「屈原及びその文学への評価」：屈原の作として伝えられた楚辞は、漢代に流行する辞賦文学の祖として、当時はその華麗で幻想的な表現は評価の対象となるけれども、作者である屈原に就いては、投身自殺の行為によって当時しばしば議論の対象となっている。これに就いては、原書第二章第五節司馬遷四対屈原等作家の批評・第三章第二節揚雄八対屈原等の評価・第五節班固三対屈原及《離騷》的評価・第四章第一節王逸など参照。「司馬遷と《史記》に関する評価」：司馬遷の著した《史記》については、儒家の伝統的な視点を打ち破るもの、発憤著書（創作の原動力を心の中に満ちる様々な怨憤・鬱結などに求める）の説を打ち出したものとして、著者は高く評価するが、それだけに当時は儒家的な観点から批判されることもあった。第二章司馬遷・第三章第五節班固四対司馬遷及《史記》的評価参照。
- 「当時の現代文学例えば漢賦への審美評価」：当時の文藝創作の形式は専ら辞賦であった。辞賦の善し悪しや作家の優劣は当時の文学理論の重要な点である。この場合、当時儒学隆盛の状況の下、辞賦の制作者には儒学者が多く、しばしば儒学的な見地から辞賦

の芸術性及びその諷諫作用が議論され、時には辞賦の表現が批判の対象となっている。第三章第二節揚雄七論賦・第四節王充八論辞賦及漢代文人・第五節班固五論辞賦など参照。

⑩「文学自覚」：魏の曹丕《典論・論文》や晋の陸機の《文賦》，摯虞の《文章流別集》などの文学論・総集が活発に生み出された時代になると、文学にそれ自身の審美価値を認めるようになる。これが所謂「文学自覚」の時代と評される。

⑪《禮記・楽記》：《禮記》の中の楽記篇のこと。前漢中期以前の儒家の「楽」に関する理論をまとめたもの。漢代に成立したものとはいえ、多くの先秦の思想的資料を持つ。個人の作ではなく、儒学者達が前漢に編纂したものと考えられている。そこでは、「心」が外界の「事物（社会生活を含む）」によって感動をうけ、音楽（実際には芸術一般）が誕生する事、芸術誕生の理論が述べられている。第二章第一節《禮記・楽記》及其他参照。

《毛詩序》：漢代は、魯・齊・韓・毛の四家の《詩》の流れがあり、魯・齊・韓の三家は、早くから学官に立てられたが、毛詩は後漢末に鄭玄が箋をつけるに及んで盛んとなり、ついには三家に取って代わった。各々の詩には序文があるが、誰が付けたかはよく分からない。著者は前漢中期以前の学者の手になるもので、一人の作ではないという。その序の中の関雎の詩の序文は特に文学論が述べられており、《詩大序》と呼ばれ、先秦から前漢に至る儒家の詩論のまとめと見なされている。そこでは、詩の持つ社会批判の作用は重んじられても、それは婉曲な表現であること、「温厚敦柔」の精神に背かないことが主張され、その結果文学の持つべき自由な批判や心情の発露に制限を加えるものになってしまったと、著者はみる。第二章《毛詩》及三家詩論参照。

⑫「董仲舒の文藝思想」：董仲舒は儒家の禮楽観を基礎に持った儒家の今文学派の大家で、漢代に道や聖人、經典を最重視する文学観を主張する先駆けとなった。「天人感応」説から一般人民の感性に従った音楽をつくる芸術共鳴説を主張した。また、詩を表面的な意味から解釈することに異議を唱えて、「詩経に決まった解釈は無い」と言った。場合によっては、原作の意味すら歪めてしまいかねないこの主張は、先秦の断章取義の流れの上に会うもので、解釈や創作の自由さを許し、現代西方の解釈学の方法とも通じる所とがあると著者はみる。その後、中国文学上、これは伝統的な審美原則の一つとなる。第二章第四節董仲舒参照。

⑬「歪められたものや変形されたもの」：儒家の《詩経》の解釈には、実際の作品の本来の性格と適合しないものも多い。例えば風、雅のいくつかの詩は、怨みの感情や反抗精神が強烈で、決して「婉曲に諫める」のではない。男女の愛情の面でも、禮教に背くものもあって、決して「禮に止まる」ものではないが、漢代の儒学者は無理に解釈を加え

ている。これは、詩歌の創作発展にも良くなかったと、著者はみている。第二章第二節《毛詩序》及三家詩論四詩の六義参照。

- ⑭「血氣心知の性」：人の持つ肉体的と心理的特性を指して言う。人間本来の特性のこと。
- ⑮「明道、徵聖、宗經」：儒家的な「道」を明かにし、孔子という聖人の判断に範をとり、五經という經典を模範として文学を考えると言うもの。梁代《文心雕龍》がこの方法で明確な文学論を作り上げることになる。
- ⑯《淮南子》：前漢中期淮南王劉安の編撰。儒学一尊に向かう轉換期にできた。それだけに内容には矛盾するところもある。文藝上では、道家的な「無為」の見地から儒家の伝統的「禮楽」が人の自然の性を抑える虚偽的なものと批判して、自己の理論を主張したが、文藝の発展まで否定してしまった。ただし、「至情」（真情・実感）を文藝成功の条件として、「憤」を文学の源泉と見なした事は、司馬遷の發憤著書説を導くものとして重視される。また、その芸術が人々を感動によって共鳴和合させ、それによって社会も和合の状態になるという芸術観が最終的には封建制度を擁護するようになっていることは、儒学の「禮楽」観と目指すところを同じくするものとなると著者は指摘する。第二章第三節《淮南子》及劉安参照。
- ⑰《史記》：司馬遷の手になる《史記》は、中国の史伝文学の祖で、後世の散文、小説、戯曲などに大きな影響を与えた。《史記》のなかの叙述や評論には司馬遷の文学観が現れており、文学批評史上の重要な役割を占める。司馬遷の学術は基本的には儒家に属するものとはいえ、儒家的な「温厚敦柔」説を超えて、著作や創作の動機及び目的に、現実批判に導かれた激情を見る「發憤著書」説を示し、後世の文学論の形成に影響を与えた。その結果後世「奇を愛し經に反する」と批判されるが、これこそ文学精神の一つの解放だと著者は述べる。第二章第五節司馬遷参照。
- ⑱《春秋》の義法：《史記》には、史伝の書として誇張や悪の隠蔽を避け、現実をそのまま記述すると言う実録の精神が見られるが、この他に「春秋の義法」を創り出し、後世の史伝文学のモデルを提出した。《春秋》とは儒家の經典の一つで、孔子の編になると言う歴史書のこと。司馬遷はそこに正義を発揚させる精神と、歴史人物に対する褒貶に作者の情感や理想・望みを託くすものがあると見て、《史記》の制作では、これを自覺的に継承発展させたと言っている。第二章第五節司馬遷参照。
- ⑲「主文譎諫」：《毛詩大序》の言葉で、音楽にのせた歌で政治倫理的節度をもって直接には君主の過失を指摘せず、やんわりと諫めること。これは、「溫柔敦厚」と共に激情そのままの発露に制限を加えるものであり、当時の儒家の文藝観の限界を示すものではあるが、芸術的な面から見れば、詩歌の婉曲で含蓄に富んだ表現で深遠な思想を表し、言葉が就きても気持ちは尽きない状況を導き、審美的な効能は高めたであろうと著

者は述べる。第二章第二節《毛詩序》及三家詩論参照。

- ⑳「正」と「奇」: 文論においてしばしば対立概念として用いられる用語。梁代の文学論《文心雕龍》では、「正」は概ね伝統的な儒家文学観に立つものであり、「奇」はそれに対立するものとして用いられている。その結果、「奇」であることが伝統思想に背くものとして批判される場合も起こるが、他方その新鮮な表現から評価の対象ともなることもある。表現に注目すれば、鍾嶸《詩品》に見られるように、「奇」(非凡)には「平」(平凡・凡庸)を対立させたものとなり、「奇」は評価を示す述語となる。《魏晉南北朝文学批評史》第二篇第三章劉勰《文心雕龍》第三節基本思想三執正馭奇の基本思想及其歴史背景、同書第四章鍾嶸《詩品》第五節鍾嶸詩論與劉勰詩論的比較参照。

# 《先漢文学批評史・緒論》参考年表

(生卒年は必ずしも正確なものではない)

|       |                   |                                                                         |
|-------|-------------------|-------------------------------------------------------------------------|
| B.C.  | 劉邦帝位に就く<br>(前漢興る) |                                                                         |
| 206   |                   |                                                                         |
| 154   | 呉楚七国乱             | 179 ↑ 劉安 ↓ 122                                                          |
| 136   | 儒教の国教化            | 179 ↑ 董仲舒 ↓ 104<br>145 ↑ 司馬遷 ↓ 78<br>178 ↑ 司馬相如 ↓ 118<br>154 ↑ 東方朔 ↓ 93 |
| 86    | 塩鉄専売可否の<br>論議始まる  | 140 ↑ 武帝在位 ↓ 87                                                         |
| 60    | 西城都護府設置           | 77 ↑ 劉向 ↓ 6                                                             |
| 51    | 石渠閣会議             | 53 ↑ 揚雄 ↓ 18                                                            |
| B.C.1 |                   |                                                                         |
| A.D.1 |                   |                                                                         |
| 9     | 王莽新を興す            |                                                                         |
| 23    | 新滅ぶ               |                                                                         |
| 25    | 劉秀即位<br>(後漢興る)    |                                                                         |
| 79    | 白虎館会議             | 27 ↑ 王充 ↓ 97<br>32 ↑ 班固 ↓ 92                                            |
| 100   | 許慎説文解字            | 137 ↑ 蔡邕 ↓ 192<br>155 ↑ 曹操 ↓ 220<br>187 ↑ 曹植 ↓ 226                      |
| 166   | 党錮の獄              |                                                                         |
| 184   | 黄巾の乱起る            |                                                                         |
| 208   | 赤壁の戦              |                                                                         |
| 220   | 献帝廃され<br>(後漢滅ぶ)   |                                                                         |